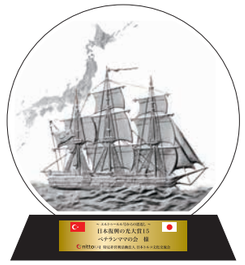
エルトゥールル号からの恩返し

日本復興の光大賞15



特定非営利活動法人 日本トルコ文化交流会

〒107-0052　東京都港区赤坂3-2-7　サムリンビル5F

TEL：03-6441-3120　FAX：03-6441-3121

協賛：Kucukbay Yag Sanayi A.S.、株式会社バハールエデュケーション、TECHNOPIAN株式会社、株式会社バハール

後援：外務省、復興庁、岩手県、宮城県、福島県

nittoKAI

特定非営利活動法人 日本トルコ文化交流会 主催

ごあいさつ

NPO法人 日本トルコ文化交流会
理事長
ウグル　ユジェル 工学博士

「エルトゥールル号からの恩返し　日本復興の光大賞15」は、2011年3月11日に発生しました東日本大震災の復興プロジェクトとして創設されました。

まず、エルトゥールル号遭難事故についてご説明いたします。
日本を訪問したオスマン・トルコの軍艦エルトゥールル号は、その帰途1890年9月、和歌山県串本町沖で岩礁に激突し、沈没しました。地元住民たちが必死に救助したものの587人が死亡・行方不明となりました。生存者はわずか69人でした。しかし、日本全国から多くの義援金が寄せられ、生存者は日本の軍艦でトルコまで無事に送り届けられました。
トルコ国民は、日本人の厚意に心から深く感謝し、この出来事は両国友好親善の礎となりました。

岩手、宮城、福島の3県を中心に甚大な被害をもたらした東日本大震災は、日本の戦後最大の自然災害となりました。震災関連死を合わせた犠牲者は、2万人を超えました。15年春現在、避難生活を続けている人は約12万人を数えます。
世界中が支援を送る中、トルコからも官民それぞれのレベルから救助や支援が送られました。
我々、日本トルコ文化交流会(nittoKAI)も、被災地で数日に渡る炊き出しや支援活動を行いました。被災した子供達を元気づけるためにトルコに招待するなど、様々な活動を繰り広げました。
大震災から4年以上がたち、復興が進まない中で、震災記憶の風化が懸念されています。

当会では、エルトゥールル号の恩返しの意味と一日でも早い友好国・日本の復興を願い、「日本復興の光大賞15」を創設いたしました。
ジャーナリストの池上彰氏をはじめ、審査員、協賛企業・後援団体の全面的な協力を得て、復興のために日夜、努力を続けている日本の民間団体の中から、特に優れた団体を選び、その功績をたたえることにしました。
この賞は、このままのスタイルで2020年の東京オリンピックまで継続し、その後は、さらに時代に即した日本復興の光大賞としてリニューアルし、末永く続けていきたいと思います。
我々は、今後とも皆様のお役に立てるよう努力して参りますので、どうぞご協力をお願い申し上げます。

nittoKAIとは

特定非営利活動法人 日本トルコ文化交流会（nittoKAI）は、日本において様々なバックグラウンドや価値観を持つ人達が交流し、互いを認め合い、尊重し合えるような社会空間を作り出したいという理想のもとに、2006年に創設されました。
日本とトルコという二国間の関係のみに限定せず、異なる文化、民族・人種 、宗教に属する人々が同じ地球市民として交流・対話ができる場を作ることで、世界平和の促進と実現に貢献することが私達の望みです。

当会では、多岐にわたる活動を行っています。各界の専門家や著名人を招いて開催する講演会では、私達の社会が抱える様々な問題について皆様との情報共有・意見交換を図ります。文化交流活動として開催する展示会や演奏会では、美術や音楽、文学などの芸術を通して、人類に共通する普遍的な価値観に共感し、互いを感性の部分から理解し合えることを期待しています。また、国際協力と相互発展に寄与する有意義なプロジェクトを行う方々に対して、国際的な学会・会議への参加や、専門施設への見学などをアレンジしております。相互扶助の精神は世界平和に何よりも必要な活動の一つです。地震や台風などの災害や戦争・紛争によって傷ついた人々や地域に対し、物資の送付や必要に応じた援助活動を行っております。

私達nittoKAIは、日本とトルコの関係という一つの入口から歩み出した友情の絆を、皆様のご支援とご協力を頂きながら全世界へと広げて行きたいと願っています。

目次

ごあいさつ ---------- 02
nittoKAIとは ---------- 03
賞の概要 ---------- 04
審査委員紹介 ---------- 05
受賞団体紹介 ---------- 06
　ベテランママの会 ---------- 06
　特定非営利活動法人・まちづくりNPO新町なみえ ---------- 08
　特定非営利活動法人・石巻復興支援ネットワーク ---------- 10
　特定非営利活動法人・再生の里ヤルキタウン屋 ---------- 12
表彰式レポート ---------- 14
来賓からのメッセージ ---------- 16
メディア紹介 ---------- 18

エルトゥールル号からの恩返し
日本復興の光大賞15とは

賞の趣旨

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、岩手、宮城、福島の3県を中心に甚大な被害をもたらし、日本の戦後最大の自然災害となりました。震災関連死を合わせた犠牲者は2万1000人を超え、住まいを奪われた約26万人が未だに厳しい避難生活を強いられています。世界中が支援を送る中、トルコからも官民それぞれのレベルから救助や支援が送られました。日本トルコ文化交流会（nittoKAI）も数日に渡る炊き出しや、被災地の子供達を元気づけるためにトルコ旅行をプレゼントするなど、様々な活動を行ってきました。
しかし、被災から約4年たち、記憶の風化が懸念されています。当会ではエルトゥールル号の恩返しと、一日でも早い友好国・日本の復興を願い、「日本復興の光大賞15」を創設しました。ジャーナリスト・池上彰氏の全面的な協力を得て、復興のために尽力している日本の民間団体の中から特に優れた団体を選び、池上彰審査委員長らが出席する表彰式を行います。

選考方法

日本復興大賞事務局が、大震災復興に関係する団体や関係者から、「日本復興の光大賞15」候補となりうる約50団体を紹介してもらい、その中から、事務局は現地調査などを踏まえて候補団体リストを作成しました。最終的に、池上彰・審査委員長を中心とする審査委員たちが「日本復興の光大賞15」「同特別賞15」を決定しました。
「基本的な選考基準」は、

（1） 地元に密着して、草の根で頑張っている民間団体。人に知られず、地道に活動を続けている「縁の下の力持ち」的な団体に少しでも光を当てる

（2） 被災地、被災者のために10年、20年、50年と長期的な視点に立って地道に活動している団体とする。活動の成果が、必ず地元に還元されるように取り組んでいるところとする

とします。

主催団体

特定非営利活動法人日本トルコ文化交流会 (nittoKAI)

共催及び後援等支援団体

協賛：Kucukbay Yag Sanayi A.S. 、株式会社バハールエデュケーション、TECHNOPIAN株式会社、株式会社バハール
後援：外務省、復興庁、岩手県、宮城県、福島県

審査委員

審査委員長：　ジャーナリスト　池上　彰

ジャーナリスト。1950年長野県生まれ。慶応義塾大学卒業後、1973年NHK入局。報道記者として、様々な事件、災害、問題などを担当する。1994年4月から11年間「週刊こどもニュース」のお父さん役として、ニュースを解説。2005年よりフリージャーナリストとして、書籍やテレビなど幅広いメディアで活躍中。2012年4月より、東京工業大学大リベラルアーツセンター教授。著書は『伝える力』（PHPビジネス新書）、『いま、君たちに一番伝えたいこと』（日本経済新聞出版社）など多数。

審査委員：　女優　宮本　信子

女優。1945年北海道生まれ。1963年文学座付属演劇研究所、1964年劇団青芸在籍時に別役実作「三日月の影」で初舞台。1988年「マルサの女」でシカゴ国際映画祭最優秀主演女優賞、第11回日本アカデミー賞最優秀主演女優賞など多数受賞。2007年「眉山」で、日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。2011年「阪急電車 片道15分の奇跡」で第36回報知映画賞助演女優賞、第35回日本アカデミー賞優秀助演女優賞など多数受賞。2014年、第65回日本放送協会放送文化賞受賞、春の紫綬褒章を受章。

審査委員：　東京大学大学院法学政治学研究科教授　藤原　帰一

東京大学法学部・大学院法学政治学研究科教授。専門は国際政治・比較政治・東南アジア政治。1956年東京生まれ。1979年東京大学卒業、1984年3同大学院法学政治学研究科博士課程単位取得中退。フルブライト奨学金奨学生として、米国イェール大学大学院に留学。東京大学社会科学研究所助教授（92−99年）などを経て、1999年より現職。日本比較政治学会元会長・日本国際政治学会理事・日本学術会議連携会員。著書は『平和のリアリズム』岩波書店（2004年）、『戦争の条件』集英社(2013年)など多数。

審査委員：　特定非営利活動法人難民を助ける会（AAR）理事長　長　有紀枝

立教大学社会学部教授。1963年東京生まれ。早稲田大学政治経済学部政治学科卒、同大学院政治学研究科修士課程修了。1990年よりAARにてボランティア開始、1991年より専従職員に。旧ユーゴスラビア駐在代表、常務理事・事務局次長を経て、専務理事・事務局長（00-03年）。2004年より東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム博士課程に在籍し、2007年博士号取得。2008年7月よりAAR理事長。2010年4月より立教大学教授。著書は『入門 人間の安全保障』（中央公論新社）など多数。

審査委員：　福島大学特任研究員　開沼　博

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任研究員。読売新聞読書委員。経済産業省資源エネルギー庁総合資源エネルギー調査会原子力小委員会委員。これまでに、福島原発事故独立検証委員会（民間事故調）ワーキンググループメンバー（2011-2012）、復興庁東日本大震災生活復興プロジェクト委員（2013-2014）を歴任。1984年福島県生まれ。東京大学文学部卒。同大学院学際情報学府修士課程修了。著書に『はじめての福島学』（イースト・プレス）、『漂白される社会』（ダイヤモンド社）など多数。

審査委員：　特定非営利活動法人日本トルコ文化交流会　理事長　ウグル・ユジェル

1972年トルコ生まれ。1995年に文部科学省の国費留学生として来日。1995年東京工業大学、物理情報工学、博士課程を修了。1999年にオリンパス株式会社に入社。2001年から日本ナショナルインスツルメンツ株式会社にてマーケティングマネージャーを努め、現在に至る。2010～2014年青山学院大学で非常勤講師。2011～2014年東京大学で共同研究員。2013年日本工学教育協会からJSEEアワードを受賞。2006年より年日本トルコ文化交流会の理事長を務め、国際交流の推進に尽力する。

大賞

ベテランママの会

http://veteranmama.jimdo.com/

設立年月：　2011年4月1日
代表：　番場さち子
所在地：　福島県南相馬市

東日本大震災後、福島県南相馬市で不安を抱える若い母親や子ども、高齢者たちの精神的なサポートをしようと立ち上がった任意団体。
番場代表は、大震災前に、福島第一原発から約20キロ離れた南相馬市で小、中、高校生を対象にした学習塾を経営していましたが、原発事故で塾生は避難してしまいました。これからは心のケアが必要であると感じ、高校の同級生ら四人と「ベテランママの会」を発足しました。「放射能の正しい知識を伝えよう」と、南相馬市立総合病院の坪倉正治医師とともに、市民向けの放射能に関する勉強会を始め、これまで約80回開き、延べ2000人以上が参加しました。
都内の大学に進学した学生から「放射能がうつる」と揶揄された話しを相談され、地元からの情報発信が必要と考え、坪倉医師らの協力で「よくわかる放射線教室」というカラー刷り、小冊子を計4万部を発行、英語版も作成しました。さらに、地元の医師らの協力で「心の健康講座」「女性講座」も開講。14年11月には、東京の駒場東大前駅近くに首都圏に住む福島からの避難者の相談窓口やたまり場となるサロン「番來舎（ばんらいしゃ）」を開設しました。放射線理解の小冊子の発行や事務所運営費などは寄付金でまかなっています。

主な活動内容

放射能お話し会

坪倉正治医師（南相馬市立総合病院・相馬中央病院非常勤医師。東京大学医科学研究所所属）と協働し、2011年12月から現在まで計80回開催。福島県内外に居住する延べ2000名に対して、放射能に関する理解を深めるための情報を、座談会形式で提供しました。

サロン活動

2012年6月より、主に南相馬市民の高齢者・女性・未成年を対象としたプログラムを提供しています。60～70代のコミュニティ形成と生きがいづくりを目的とした、編み物サークル、10代を主な対象とし、福島県内外の様々な分野の第一線で活躍する社会人（医師・大学教授・会社経営者・NPO代表など）に講話いただくことで、将来の選択の助けとする会など、述べ5630名が参加しました。

講演活動

2013年8月より、「南相馬市の現状を理解したい」という県外からの声にこたえる形で、代表の番場さち子が福島県内外で講演を実施しています。これまで計38回、述べ約1700名が聴講しました。

小冊子「福島県南相馬市発 坪倉正治先生のよくわかる放射線教室」の作成・配布

2014年10月、小冊子「福島県南相馬市発　坪倉正治先生のよくわかる放射線教室」を、早野龍五・東京大学大学院理学研究科特例教授の監修のもと、坪倉正治医師と共に作成しました。初版2万部（全て配布済み）、第二版2万部（うち3000部を配布済み）、英語版1万部（うち2000部を配布済み）にのぼります。

活動において評価された点

審査員長　池上彰氏

放射線についての正しい知識を得てもらうための自発的な啓蒙活動

50もの団体がそれぞれの活動をしており、甲乙付け難く、審査員も非常に頭を悩ませましたが、東日本大震災の大変な被害があった中、とりわけ福島の場合はまだ震災が終わってないわけですね。原発の事故があった、大勢の人が避難をした、そしてまだ帰れない、あるいは風評被害ということもあります。他の県とはまた違った苦しみ、悩みの中で多くの方が頑張っていらしゃるわけです。

その中で、番場さんは、福島の原発からおよそ20キロの南相馬にいらっしゃったのですが、この事故の後、南相馬の人達が大勢いなくなってしまった。あるいは中には東京に出て行った大学生が「福島から来たのか。放射能がうつる」ってからかわれた。そういう悲しい現実を聞き、今こそ放射能、あるいは放射線、放射性物質についての正しい知識が必要なのではないのか、と考えられました。
特に福島の場合、幼いお子さんをお持ちのお母さんたちは大変な心配をしてるわけですね。そういう人達に放射能についての正しい知識を得てもらおうと、専門の先生から色んなお話を聞きながら、なんと自費で「よく分かる放射線教室」というパンフレットを作ってしまった、しかも英語版まで作ってしまいました。そして色んなところで放射線についての正しい知識を得てもらうという啓蒙活動をずっと続けてこられたということ。本当に頭の下がる素晴らしいことだなと思っています。

皆さん方がご存知のように今それぞれの団体の方々、皆さん、復興に当たっては、勿論、国あるいは自治体からの支援というのは必要ではあるのですが、ただそれを待っているのではないということ。それぞれの皆さんが自分達で何かをやろう、国や行政に頼らないでやることをやっていこうじゃないかと行動、自ら立ち上がって活動されたこと、これが素晴らしいことなんだなと思っています。
私達は県外にあって微力ではありますが、少しでもそういう方々へのお力添えになればと思って大賞に選びました。本当におめでとうございます。

受賞者コメント

地震、津波、そして原発災害で、私たちは多くの大切なものを失いましたが、新たな財産も生み出しました。坪倉正治先生や、そのボスでいらっしゃる東京大学医科学研究所の上　昌広特任教授との出会いもその一つです。ベテランママの会は、たくさんの不安の声を聴き取りし、私たちが出来ることを淡々とこなしてきただけに過ぎません。
「日本復興の光」とは、震えるほどのいいネーミングだと感じ入ります。私たちがそれをいただけるのであるとすれば、坪倉正治先生と上　昌広先生のお導き以外には考えられません。お二人の先生方をはじめ、私どもを支えてくださった多くの先生方、ご支援くださった皆様に、「日本復興の光」の賞を、僭越ながら、私どもからも差し上げたいと思います。また日本トルコ文化交流会、トルコの皆様、お選びいただきました審査員の先生方にも厚くお礼申し上げます。
そして、代表番場の活動を、いつも信頼してサポートしてくれている自慢の我がスタッフたちに「ありがとう」と言わせてください。
素人集団の私どもに、「光」を当てていただき、感謝申し上げます。

ベテランママの会　代表
番場さち子さん

特別賞

特定非営利活動法人
まちづくりNPO新町なみえ

http:sinmachinamie.com

設立年月：　2011年10月23日
理事長：　神長倉（かなくら）豊隆
所在地：　福島県二本松市

福島県浪江町は東日本大震災の発生後、全町避難を強いられています。人口2万1000人のうち、原発事故の影響で故郷を喪失し、福島県内に15000人が避難し、北海道から沖縄、そして海外に約6000人が住んでいます（13年春現在）。
大震災の発生後、浪江町役場は二本松市に移動しました。
「まちづくりNPO新町なみえ」は、二本松市の浪江町役場内を事務所にし、浪江町民の「誇り」と「文化」を取り戻すため、ふるさと再生や失われた住民同士の絆を取り戻そうと各種事業を進めています。
神長倉理事長は大震災前に浪江町で花屋を営んでいました。しかし、浪江町に帰還できる目途も立たない中で、家業を継ぐはずだった息子は、神奈川県の避難先で自宅を建て、会社員としての人生を歩み始めました。
2019年4月が浪江町民が浪江町に帰還する予定日ですが、除染やインフラ整備の問題などがあり「実現のめどは立っていません」（神長倉理事長）。避難生活が長引くにつれて、県外などに散り散りになっている町民同士の絆をどのように保ち続けていくのかなど課題は山積しています。

主な活動内容

町民とふるさとを繋ぐイベントの開催

「町民と町民をつなぐ▽町民とふるさとをつなぐ▽町民と未来をつなぐ」ために、二本松市の夏祭り期間中に浪江の盆踊りを開いたり、浪江町の最大のイベントである「十日市祭」をＪＲ二本松駅前で「復興なみえ町十日市祭」と銘打って実施しています。14年11月末に二日間開いた十日市祭には県外に避難している町民たち計25000人が訪れました。

町民の交流会の開催

福島県内だけでなく、富山や京都、広島、沖縄など全国各地でも浪江町の避難者たちとの交流会を開きました。

復興まちづくりのためのワークショップ

2012年3月より復興まちづくりのためのワークショップを早稲田大学の支援を受けて開催。早稲田大学都市・地域研究所などと協力して、復興後の浪江町の街づくりをどのように進めるのかを、未来の浪江町の模型を造ったり、浪江町民の意見などを集約しながら調査、研究しています。

復興まちづくりシンポジウム、浪江町復興まちづくり協議会の発足

2014年復興まちづくりはヒアリングを中心に町民の求めるまちづくりを聞き取り、後の計画に反映させるべく全12回の調査を行いました。自治会長会議の主催は計3回でした。

活動において評価された点

審査員　開沼宏氏

町民の“誇り”と“文化”を取り戻すため
地域の伝統を避難先でも再現

各団体が復興に向け活動しておられる、その中でも新町なみえさんの活動が素晴らしかったところが幾つもあったゆえに今回の賞となりました。「震災から4年間ずっと景色が変わっていない」というような紋切り型の表現をされがちな被災地だけれども、被災地に関心をよせる方に気付いてもらいたいのは、被災地の風景にも少しずつ変わっている部分があること、そしてそこに色んな人の営みがあること、だと思っております。

新町なみえさんを介し、浪江で伝統的にあった市をもう一度、避難先で再現をされている。あるいは全国に避難をされている方に細かく丁寧に会いに行き、そこでコミュニティーを再構築していくような活動をされております。

浪江については、早くとも2019年にならないと帰還の目処がたたないというのが現状でございますけれど、そこに向けて皆さんの希望をつないでいる非常に貴重な活動をされているということで今回の受賞ということになります。

受賞者コメント

今回の受賞にあたり本当に有難うございます。私たちの復興に対する姿勢や業績を認めて頂けたものと思っています。
エルトゥールル号が和歌山に漂着したのは1890年、今から125年前の事だと伺っています。国境を越えた人々がお互いの痛みを感じて和歌山の人々が人間として当然の如く、トルコの乗組員を救ったのだと思います。私たちも多くの人々が多くの課題の元で生活を余儀なくされています。浪江の皆さんの中でどういう訳か和歌山に避難された方がいませんでしたが、まさか、この賞の受賞が和歌山と浪江町を結ぶ結果になるとは考えてもいませんでした。これを機にトルコと和歌山が身近なものとなりました。
復興には長い時間がかかります。そして、いろいろな人との出会いがあり多くのご支援を賜りながら、一つ一つ課題を解決して行かねばなりません。どうぞ、これから先も私たちと、ふるさとの復興を末永い目でお見守り下さい。本当にありがとうございました。

NPO新町なみえ　理事長
神長倉豊隆さん

特別賞

特定非営利活動法人
石巻復興支援ネットワーク
（通称）やっぺす

http://yappesu.jp/

設立年月：　2011年12月
代表理事：　兼子佳恵
所在地：　宮城県石巻市

「みんなで復興やっぺす」。
「やっぺす」とは石巻の方言で「一緒にやりましょう」という意味です。11年12月に法人化し、今年で4周年となりました。
地元出身の女性を中心に運営、被災者の自立支援と、震災前の当たり前の生活を取り戻すための各種事業を展開しています。「石巻に恋しちゃった」では、お菓子作り、絵手紙作り、フラダンス、蕎麦打ちなど地元の「達人」たちによる体験プログラムも。カナダ生まれの親育てプログラムNP（ノーバディーズパーフェクト）講習会の開催やNPファシリテーターの養成を通して、子育て中の母親たちの孤独感やストレス軽減を図るママ・子ども支援事業や化粧品会社などと一緒に、女性の力を復興まちづくりに活かすための化粧、スキンケア講座やスキルアップ講座なども開催しています。
また、「やっぺす」は、宮城県の委託で復興に向け、新しく事業をスタートする起業家たちの支援事業も行っています。
石巻市の震災による死者、行方不明者は4000人。兼子代表理事は「県から支援を受ける起業家たちの新事業でも途中で失敗するケースも少なくありません。その意味でも起業した時点はゴールではなく、あくまでスタートだと考えます。地元のために地元に根付く支援事業を根気よく進めて行きたい」と話しています。

主な活動内容

子育て支援
子育て中のママたちが集える場であり、ママたちの夢を応援するカフェ「ママカフェ（Café butterfly）」の運営、また、外で働くことのできない育児中のママ向けに自宅でできる仕事をつくるため、石巻のママたちが想いを込めて作るハンドメイドアクセサリーブランド「Amanecer（アマネセール）」を立ち上げたりなど、小さいお子さんを持つお母さん方が楽しく子育てできるようサポートと子育てしやすいまちの実現に向けた環境づくりを行っています。

担い手の育成
誰もが笑顔で暮らすことのできる多様性のある石巻を目指し、女性や子ども、若者を中心とする担い手の育成を行っています。復興に向けて、課題解決に挑む20名の社会起業家の支援をする「やっぺす！起業支援ファンド」と女性や若者50名のスキルアップを目的とした「やっぺす！人材育成スクール」を実施しました。

仮設住宅への支援
孤独死やアルコール依存症、幼児虐待等を防止するため、仮設住宅内でのカルチャーセンター、市民農園、子どもの遊び場運営等を行い、住民の方々がお互いに支いあえる仕組みや、仮設住宅を中心とする地域全体のコミュニティ作りをしています。

復興コーディネート支援
被災地での支援活動を希望する企業やNPO等のニーズと現地のニーズをマッチング及びコーディネートしています。

活動において評価された点

審査員　藤原帰一氏

女性の力を復興まちづくりに！
生活視点の地味な作業から着実な結果

東日本大震災で大きな被害を受けた地域で活動される皆様を前にするとき、私は受賞者を選ぶなんて偉そうなこと言えた義理ではありません。そんな上から目線の立場ではありませんが、石巻、そして宮城県の非常に大きな災害を受けたこの地域において、じつにさまざまな活動を続けられていることを知ることができました。評価というよりは胸を打たれる、頭が下がるという思いでおります。

その中で特にやっぺすに私共が感銘を受けたポイントは、簡単に言えば生活の視点、そして女性の視点に貫かれていることです。やっぺすの取り組まれているお仕事は、決して大仰な復興事業などというものではありません。復興というと、つい大きな建物を作らなきゃいけないとか、あるいは大規模な開発、再開発などといった内容を考えますが、やっぺすのお仕事はそういう大文字の復興じゃなくて小文字の復興です。

例えば、お母さんが子供を生んで働くためにはどうしたらいいだろうか、子育ての支援をどうしたらいいんだろうか、働くってそもそも働くところがない、雇用を創出するってどうやったらいいんだろうか。家でアクセサリーを作って、作ったものを地味に売って歩く、それが2012年で1700万円の収入をあげられたということですが、そういう生活目線、そして女性目線の非常に地味な、しかし着実な作業を努めていらっしゃいます。

大きなことを言ったところで、私たちは一人一人の人間として生きていくわけですね。その地に足の着いた視点から被災地を支えるという意味で、とても素晴らしいお仕事だと思います。そのような理由から、私たちは、やっぺすに授賞することを決定しました。

受賞者コメント

今回の受賞は、先に進めず壁にぶつかるたびに自分の生かされた意味を何度も問い、しゃがみこんでしまう私を時に厳しく、時に優しく寄り添い続けてくれるスタッフや支え続けてくださっているみなさんと共に頂いた賞だと思っています。
知識がないまま震災直後から活動を始めた私は、とにかく自分にできることは何か？何が必要なのか？悩み、答えを探し走り続けてきました。
その中で必要だと強く感じたことは、「学び続けること」「人は平等でなければならないということ」です。
当たり前だけどできていない現実。学歴やお金がなくても互いに認めあい手を携えることができれば、争うことなく前を向いて進むことができます。
私たちに出来ていることは小さいことかもしれません。けれども震災で失くしたものに違いはあっても、喪失感と向かいあうことがどれだけ大変なことなのかを知っているからこそ自分たちにできることもあると信じ、歩みの遅い私たちの団体と諦めず寄り添ってくださるみなさんや次世代を担う子どもたちに「ご恩つなぎ」ができるよう現状に甘えるのではなく、更に努力を重ねていきたいと思います。

NPOやっぺす　代表理事
兼子佳恵さん

特別賞

特定非営利活動法人
再生の里ヤルキタウン

http://ameblo.jp/yarukitown/

設立年月：　2012年7月6日
理事長：　熊谷耕太郎
所在地：　岩手県陸前高田市

大震災の時、熊谷理事長は福島県郡山市在住のサラリーマンだでした。道路は損壊、雪がチラついて、ガソリンがない中、やっとの思いで、故郷・陸前高田市に戻った熊谷さんは、津波被害などであまりに変わり果てた故郷の姿に驚きます。一年間は、週末に郡山から陸前高田市に通い、ボランティア活動をしていました。会社を退職した熊谷さんは、地元に戻り、本格的に陸前高田の復興に取り組み、12年7月に法人化しました。
陸前高田市の大震災の死者、行方不明者は約1,800人。被災者はちりぢりになり、故郷は崩壊。避難生活が長期化すると、うつ病や孤独死が増えることを懸念した熊谷さんは、「まず必要なのは、人々が集まれるコミュニティ広場だ！」と思いたち、行政に訴えました。しかし、職員も多く亡くなっており、市役所の対応もにぶかったといいます。ブルドーザーなど重機の運転免許は持っていましたが、一度も動かしたことのなかった熊谷さんは見よう見まねで動かし、陸前高田市米崎町の自宅の農地を造成して、12年12月、コミュニティ広場をオープン。
「再生の里ヤルキタウン」の会員は15人。理事長報酬はなし。事務局は妻が手伝い、財力、能力、組織力が乏しいと言う。重機も、当初は自費でレンタル。熊谷さんは「これからも被災者のための希望の場を造り続けていきたい」と話しています。

主な活動内容

ボランティア合宿施設及びコミュニティ広場の造成建設

“憩える！集える！元気を発信する！みんなのコミュニティ広場”をオープン。また、住民が集えるサロンを併設した仮設商店街「ヤルキタウン」の一角に「みんなの茶ロン」を開設し、会員の“ヤル貴婦人”たちが食事やコーヒーなどを有料で提供しています。中学、高校生のための勉強・交流の場「自間学かふぇ」を開き、専修大学生が中心になり関東の大学生でつくるボランティアサークルが勉強や交流を深める。１４年１２月、２周年記念感謝デーイベントを開催しました。

ヤルキタウン花画廊

ボランティアの力を借りながら自分の果樹園を造成して、仮設住宅に住む被災者のための家庭菜園を造り、また、桜の木（日本三大桜の子孫木）をはじめ種々樹木を植えました。またオランダから寄付されたチューリップなどで花壇を造り、市民の公園として散策路を整備し「ヤルキタウン花画廊」と名付けて通年楽しめる新たなデートスポットを構築中です。

体験教室及び暦イベント

シンガーソングライターとバンド演奏ライブのXmasイベント、子供向け映画鑑賞会、パッチワーク体験教室、牛乳パック工芸、陶芸教室等の各種体験教室の他、地域住民交流のための祭りやコンサート、BBQやハロウィンパーティー等、四季折々のイベントを開催しています。

活動において評価された点

審査員　宮本信子氏

自分の情熱とか気力で開拓してく、その気持ちに私は非常に胸打たれました！

熊谷さんへの色々な聞き取りのお話や、スライドを見せていただきました。その中で私は熊谷さんのブルドーザーに乗った、まっ黄色のブルドーザーに乗った、力強い笑顔が忘れられませんでした。

また私は、やる気って言う言葉が大好きです。その熊谷さんのやる気は、自力で組織力がなくても行動する。慣れないブルドーザーを動かしながら…。そのブルドーザーを借りるお金が1万5千円もしたのだそうです。それを全部ご自分でお出しになって、それが2万円になり、でもこのところは日立の会社の方が貸してくださる。そういうお話を伺ってすごく嬉しかったです。
何もないところから何かを頼ってするのではなくて、自分で自分の情熱や気力で開拓していく、その気持ちに私は非常に胸打たれました。

そしてその思いがどんどんどんどん広がっていって、ボランティアの方とか、それからオランダからのチューリップを沢山植えたこととか、綺麗な映像を一杯拝見しました。そういう景色をみたら人の気持ちってとっても和らぐし、皆さん集って何か話し合って笑ってらした。そのスライドの中の皆さんは、笑顔がとてもステキでした。勿論ご苦労はあると思います。

理事長さんはお金をいただいていないそうですので、これが私心配です。奥様も事務局で働いていらっしゃいますし。いつかそういうことが少し糧になることがあれば、どんなにいいかしらって私は思いました。

これからもお体には気をつけてブルドーザーを動かして下さい、熊谷さん、お願い致します。

受賞者コメント

今回の受賞が新たな励みとなり会員一同深謝に堪えない次第です。
明治時代の悲しい海難事故、エルトゥールル号からの恩返しというとっても意義深い支援、大切な“両国友好親善の礎”として更なる友好関係の発展を願い、貴重な義援金を活動の趣旨に活用させていただけることを謹んで感謝申し上げます。
市街地が壊滅、甚大な犠牲者数、復旧復興長期化。「これ以上一人たりとも二次的被害者（エコノミー症候群、うつ病、孤独死等）を絶対に出してはならない！」そんな思いから喫緊に必要なものはコミュニティの場、交流が出来る空間と直感し“憩える！集える！元気を発信する！みんなのコミュニティ広場”を創設しました。併せて“ヤルキタウン花画廊”を新たなデートスポット、市民の公園として開放できるように構築しております。イベント開催等を通して地域住民交流が、前述のコンセプトに繋がると確信し、交流人口拡大に貢献、人口流出を食い止めて、ふる里まちづくりを市民主体で創造します。
等々が幣法人のポジションと認識して行政の補完に努めて参ります。引き続きなお一層のご支援ご協力をお願い致します。この度の特別賞ありがとうございました。

NPOヤルキタウン　理事長
熊谷耕太郎さん

表彰式レポート

2015年2月28日（土）、明治記念館にて
「エルトゥールル号からの恩返し　日本復興の光大賞15」表彰式が行われました。

（左上）池上彰　審査委員長／ベテランママの会　代表　番場さち子さん
（右上）宮本信子　審査員／NPOヤルキタウン　理事長　熊谷耕太郎さん
（左下）藤原帰一　審査員／NPOやっぺす　代表理事　兼子佳恵さん
（右下）開沼宏　審査員／NPO新町なみえ　理事長　神長倉豊隆さん

「日本復興の光大賞15」を受賞した「ベテランママの会」には、賞状とエルトゥールル号の彫られたトロフィー、そして賞金100万円が授与されました。
「日本復興の光特別賞15」には、「特定非営利活動法人・まちづくりNPO新町なみえ」、「特定非営利活動法人・再生の里ヤルキタウン」、「特定非営利活動法人・石巻復興支援ネットワーク　（通称）やっぺす」の3団体が選ばれ、賞状とトロフィー、賞金10万円が授与されました。

表彰式には、スポンサー企業や受賞団体の皆様の他、トルコと縁の深い、外務副大臣　中山泰秀様、衆議院議員　小池百合子様、参議院議員　浜田和幸様もご来場下さり、ご挨拶を頂戴しました。また、エルトゥールル号と縁の深い和歌山県の知事からもメッセージを頂戴いたしました。

「審査委員会では、いずれの団体もすばらしい活動をしていますが、地道に素晴らしい活動を一生懸命しながらも、これまであまり光があたってこなかった団体があります。ぜひそういう団体を選ばせていただこうと話し合い、今回の受賞団体が選ばれました。素晴らしい団体が選ばれ、こうした選考プロセスに参加させていただき大変光栄です」
ー特定非営利活動法人難民を助ける会（AAR）理事長　長有紀枝氏より

東日本大地震の犠牲者への黙祷から始まった表彰式は、神宮前インターナショナルエクスチェンジスクールの子供達による復興応援ソング「花は咲く」で幕を閉じ、トルコ料理の振舞われた懇親会へと続きました。

写真上段：
（左上）外務副大臣　中山泰秀氏
（右上）衆議院議員　小池百合子氏
（左下）参議院議員　浜田和幸氏
（右下）特定非営利活動法人難民を助ける会理事長　長有紀枝氏

写真下段：
（左上）ジャーナリスト　津田大介氏
（右上）一般社団法人RCF復興支援チーム代表理事　藤沢烈氏
（左下）司会でご協力いただいた日本放送協会の武内陶子氏
（右下）トルコ料理を楽しんで頂きました

「エルトゥールル号からの恩返し　日本復興の光大賞」は東北の復興が終わるまで毎年、続ける予定です。

来賓からのメッセージ

外務副大臣　中山 泰秀氏

東日本大震災から早くも4年を迎えようとしております。震災直後、トルコからは宮城県に捜索救助隊を約3週間長きに渡って派遣をしていただきました。これは米国を除く全ての支援国の中で最長の期間であり、まさに日本とトルコの絆の強さ、そして深さを表すエピソードの一つと言えると思います。
実は私のおじいちゃん、祖父は初代の大阪のトルコ名誉総領事を務めさせて頂いておりまして、子供の時日の丸の旗の次に覚えたのが実はこのトルコの国旗であります。そういった特別の思いがあるトルコ、外務副大臣としては勿論、個人的にも両国の友好協力関係の強化に取り組むとともに本日受賞された皆さんを始めとする関係各位と一緒になって東日本大震災への復興に引き続き尽力をして参りたいと思います。
今回震災からの早期復興を願い日本復興の光大賞を創設された日本トルコ文化交流会をはじめ関係者の皆様方に改めまして心から感謝を申し上げますとともに益々のご活躍をご期待申し上げます。そして受賞された皆様、おめでとうございます。

衆議院議員　小池 百合子氏

被災地でこれまで頑張って来られた皆様方がエルトゥールル号のご縁でトルコからの励ましを受けられました。素晴らしい日本とトルコの新しい友情の歴史を作っていただいていることに心から感謝を申し上げます。
私もトルコとのお付き合いは結構長く、つい最近のご縁で申し上げますと、私が会長を務める日本・シリア難民支援推進議員連盟で、シリアの難民の子供達に学校を作ることにしました。nittoKAIの皆様方のご協力を得まして、トルコ側にシリアの難民の子供達のための学校を作りました。トルコの皆さんが本当に頑張って支援してくださったからこそ、このさくら小学校は設立一年目をこの夏には終えようとしております。
エルトゥールル号の稀有な出来事によりかえって友情が深まるという。このことを大切にしながら、日本とトルコの友好・交流が本日の大賞を機にさらに深まることを心から祈念申し上げます。また今日受賞された皆様方はさらにこれからもご活動されていかれますことを心より祈念申し上げます。おめでとうございます。

参議院議員　浜田 和幸氏

今回この復興大賞を受賞されたみなさん本当におめでとうございます。あの大震災からもう４年経ちますけれども現地ではまだまだ厳しい生活が余儀なくされていることを私も対策本部で仕事していた関係上よく承知しております。
しかし、こういった悲劇・災害はいつどこで起こっても不思議ではありません。トルコであっても世界のどこであっても、同じです。大事なことはその本当に困ったときに助けてくれるのが真の友ということであり、日頃から信頼と友情の輪を広めておくことだと思います。
過去の様々な出来事からどうやって未来のより平和で、安全な社会を造っていくのか。そういうことが問われているわけです。未来に向かってそういう価値観を大事に育んでいくことが、125年前のエルトゥールル号の教訓です。今回受賞された方々、応援された多くの方々、これからも日本から世界に誇れるような友情・信頼の輪を積み重ねて下さい。われわれも政治の立場でそういう動きを積極的に応援します。

和歌山県知事　仁坂 吉伸氏

日本とトルコ共和国は大変良好な友好親善関係を享受しておりますが、両国を最初に結びつけたのは、トルコ軍艦エルトゥールル号の日本訪問と和歌山県串本町大島沖において同軍艦が遭難し、地元住民が懸命な救助にあたったという悲しくも人々の心ゆさぶる事件です。本年は、このエルトゥールル号遭難事件から125年という節目の年にあたり、串本町で追悼式典が開催される予定である他、この遭難事件をめぐる日本とトルコとの「友情の絆」を内外に広く伝えるべく、日本・トルコ両国政府の賛同を得て映画「海難1890」が制作されることになり、撮影が着々と進んでおります。
今回、日本トルコ文化交流会は、2011年の東日本大震災からの復興に尽力している優れた民間団体を表彰する「日本復興の光大賞」を創設されましたが、このような取組を通じて、国籍や世代の違いを超えて日本とトルコの方々が幅広く交流することで、両国民の友情の絆が更に強くなり、交流の裾野がますます広がっていくものと確信しております。
私たちは、先人たちが育んできた友好親善関係を次世代に伝えていかなければなりません。日本・トルコ友好の原点の地である和歌山県の知事として、日本トルコ文化交流会の活動に深く感謝申し上げ、尊敬の意を表する次第です。

メディア紹介

各メディアで取り上げられた「日本復興の光大賞15」に関する記事を紹介します。

日本復興の光大賞を受けた「ベテラン ママの会」代表

番場（ばんば） さち子（こ）さん(53)

ひと

福島県南相馬市生まれ。法政大卒。東日本大震災前から同市内で学習塾を営んできた。1女1男の母。

「神様からのプレゼント」。福島県南相馬市で、高校時代の同級生5人でつくった「ベテランママの会」が、東日本大震災の復興に尽力したとして「日本復興の光大賞15」（NPO法人日本トルコ文化交流会が今年創設）の大賞を贈られた。

会の結成は東京電力福島第1原発事故から間もない2011年4月。不安を抱える若い母親たちのために専門医師を招き「放射能お話し会」を80回以上開いた。お年寄りの生きがい作りに編みものサークルも作った。地震、津波、原発事故で失ったものは多いけれど、新しい出会いが財産」

昨年8月、放射線について分かりやすくまとめた小冊子を発行した。データに基づいた「南相馬市の市街地の空間線量は西日本と変わらない」との記述などに、電話やメールでバッシングを浴びた。「南相馬って人が住めるの？」と聞かれたり、名刺を受け取ってもらえなかったりする。「誤解は根深い」と感じる。

震災直後、職場から車を運転して自宅に向かった。真っすぐ行くか、右へ曲がるか……。直感的に右へ曲がり津波を逃れた。生かされたんだ。

中傷にくじけず、活動を続けられたのは、生き残った者としての使命をかみしめてきたからだ。

福島から自主避難する母子らを支援するためのサロン「番來舎」を東京都内で昨秋スタート。「南相馬を担う子どもたちを育てること、大人の学び場を充実させること、やりたいこと、たくさんあるなあ」

文・坂根真理　写真・丸山博

2015・2・20

日本復興の光大賞を受けた「ベテランママの会」代表 番場さち子さん

（毎日新聞）

2015年2月20日付の毎日新聞に、日本復興の光大賞を受けた「ベテランママの会」代表の番場さち子さんの記事が掲載されました。

大学

池上彰の大岡山通信

若者たちへ ▶35

情けは人のためならず

震災支援 トルコとの友情

日本とトルコの友好の絆は1世紀を超えてもなお生き続けている

エルトゥールル号からの恩返し

日本復興の光大賞

後援：外務省 復興庁 岩手県 宮城県 福島県

表彰式に臨んだ被災地の復興団体代表者（写真前列）ら審査員と文化交流会（2月28日、東京）＝NPO法人日本トルコ文化交流会提供

池上彰の大岡山通信「震災支援 トルコとの友情」

（日経新聞）

2015年3月9日付の日本経済新聞に、審査委員長を務めた池上彰氏が、日本復興の光大賞について記事を書かれています。

地元密着の団体活動を評価

「日本復興の光大賞」に

ベテランママの会（南相馬）

放射能勉強会80回開く

大賞を受賞したベテランママの会の番場さん（右）、坪倉医師（右から2人目）。活動を続けるメンバー

特別賞を受けた「まちづくりNPO新町なみえ」

特別賞に「NPO新町なみえ」

ベテランママの会（南相馬）に栄誉

復興の光大賞表彰式

後援：外務省 復興庁 岩手県 宮城県 福島県

地元密着の団体活動を評価「日本復興の光大賞」にベテランママの会（南相馬）

（福島民報）

2015年2月11日付の福島民報に、日本復興の光大賞を受賞した「ベテランママの会」および特別賞を受賞した「まちづくりNPO新町なみえ」の記事が掲載されました。

ベテランママの会（南相馬）に栄誉

（福島民友）

2015年3月1日付の福島民友に、日本復興の光大賞を受賞した「ベテランママの会」および特別賞を受賞した「まちづくりNPO新町なみえ」の記事が掲載されました。